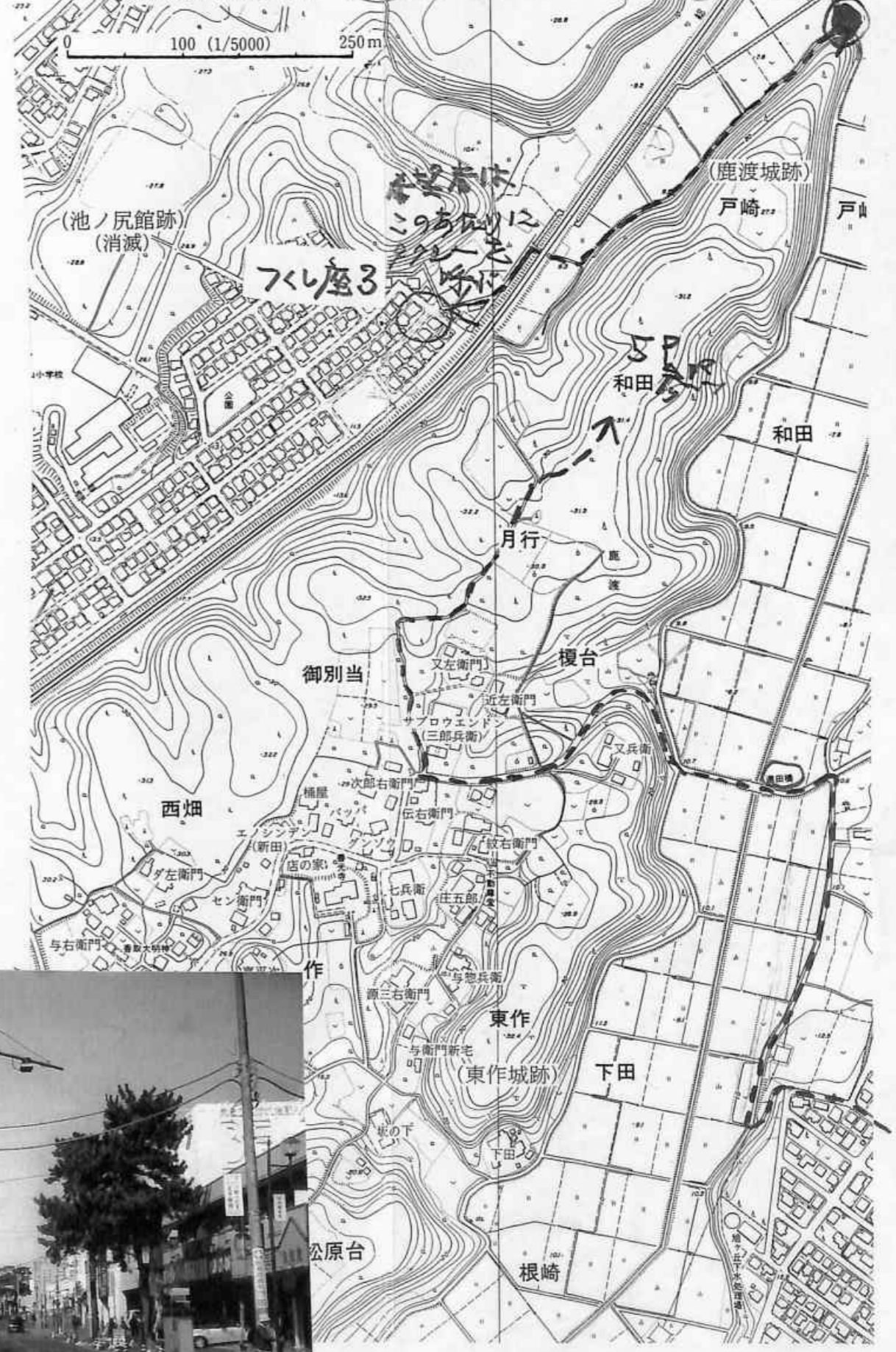


YOTSUKAIDO



Fig. II-6 鹿渡城跡周辺の小字・屋号等 (四街道市都市計画図使用)



四街道駅前

四街道市

県の北部に位置し、昭和三〇年一〇月、千代田町と旭村が合体して四街道町となり、同五六年四月に市制を施行した。市内には、海拔三〇〇前後の丘陵台地が広く分布し、東境沿いを鹿島川が北流している。

市の南西部、成田線の四街道駅付近に、中心市街が形成されている。そのあたりは、昔は成田街道と佐倉街道が交差する、交通の要地とされていたところ。市名もこれに由来している。

四街道の歴史は旧石器時代にまでさかのぼる。市内和良比遺跡から先石器時代の石器が発掘され、約一万年前からと推定されていた。当時の歴史は二万五〇〇〇年前までさかのぼることができるといわれている。

鎌倉から室町時代にかけての中世期、県内では三〇〇ヶ所以上に城が築かれており、そのうち当市では二ヶ所が知られている。中世前期を通じて下総一帯は千葉氏が治めたが、なかでもこのあたりは千葉庄といふ千葉常胤の領地であった。ただ現在では城や館に関する記録はほとんど残っていない。

*年中行事 皇産霊神社とらんこ祭(二月二十五日)

バス下り

<日時> 平成17年3月4日（金曜日＝雨天のとき8日）、最初の乗車券＝四街道まで

<往路> 八幡宿9時07分、千葉21分着、⑨番線乗り換え33分発、四街道43分着
バス58分発②番みそら団地行き7分＝160円、団地北下車

<移動> 城から徒歩25分、無理な方はタクシーで四街道、先行して千葉へ
物井→千葉、駅直前バス停大学病院行き210円、中央博物館前下車

<復路> 本千葉→八幡宿17時ころ着（予定）

山岸弘明

鹿渡城 (通称＝獅子が鼻城)

1) はじめに (地名の由来)

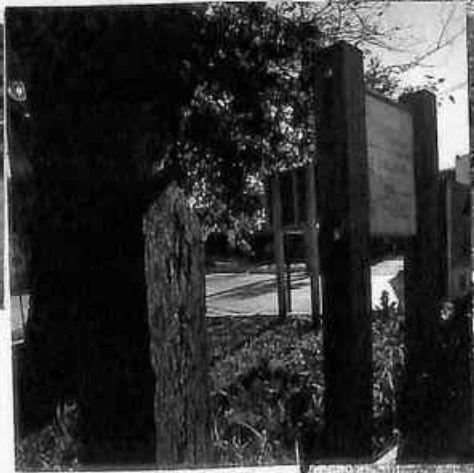
- ① 四街道＝かつて東金船橋道、佐倉千葉道が交差する畦田の旧道交差点を四街道と俗称したことによる。江戸時代は主街道を欠け、広漠たる原野として放置され、佐倉藩の鷹狩りや大砲試射場が設けられたりした。維新後陸軍砲兵第18連隊が置かれ、駅周辺が急激に発展した。現在は大規模造成工事で住宅地が変わっている。
- ② 鹿渡＝昔「ししわたし」で、いまは「しかわたし」。江戸時代は馬渡、山梨、鹿渡と続く、銚子からの魚輸送道の寒村という。ししは鹿や猪など四つ足動物、けものしか通れない所という意味。

2) 鹿渡城の歴史と地形

- ① 戦国時代、千葉系、臼井一族鹿渡氏居城とされるが詳細は未詳。臼井城の支城（砦）的役割が強い。千葉系図には臼井六郎の長男知常が鹿渡太郎、その子常氏の鹿渡小太郎がある。また一節は、山梨大隆寺にある元和元年、間宮吉俊の臼井支城とし、天正18年の豊臣秀吉小田原攻略で在地支配権を失って帰農したともいう。
- ② 鹿渡城は印旛沼の支流、小名木川の谷の狭間に突き出た比高20mほどの台地先端に立地する。地形が猪の鼻に似ていることから通称獅子が鼻城（砦）という。（千葉城も同意の猪鼻城）
- ③ 表面観察による城遺構は南北およそ200m、幅130mだが、南側を意識しており、南隣接地にV郭の存在も考えられる。
- ④ 土塁、空堀、腰曲輪で囲まれた主郭（本丸）を中心に、II郭、III郭（2の丸）、IV郭（3の丸）からなる変形連郭式平山城（丘城）。小型だが充実した縄張りといえる。随所に戦国後期中世城郭の特徴を色濃く残している。
- ⑤ 見どころは二重の内升形虎口、東面斜面と縦堀、土塁と櫓台、空堀折歪みなど。一帯は「四街道市郷土の森」として整備され、土日は緑地公園に訪れる家族連れで賑わう。



↑四街道駅
→四街道橋



3) 旧名主小川家の長屋門と道標

- ① 小川家（屋号サブロウエンドン＝三郎兵衛）
長屋門＝江戸時代、上級武士か名主しか許されなかった門形式。
長屋造りの門で両袖に人が住んだり、倉庫だったりした。
- ② 馬頭観音兼道標（弘化2年）
馬頭観音＝仏教の8大明王の1つ、観世音菩薩の化身。頭に馬頭を乗せたり、馬乗りなどがある。馬の供養に使われることが多く、神聖化され独自の信仰に発達した。
道標＝およそ100m先の十字路口に置かれていたものと考えられる。
西をうわだ（大和田）、かやた（萱田）道
南ふなばし（船橋）、こてはし（こて橋）道
北やまなし（山梨）、馬わたし（馬渡）道
東おなき（小名木）、わらび（和良比）、さかど（坂戸）、東金道

4) 四街道市郷土の森 (トイレ休憩)

- ① 城地周辺を市民緑地公園として整備
- ② こならの森周辺は城の前面にあたる。尾瀬の狭まった地点を堀切、切断すれば簡単に郭が作れるので、外郭や3の丸に相当するV郭の存在も考えられる。（発掘しないとわからない）

5) 大手虎口

- ① 現在確認されている城域の正面虎口。
右手の谷津に下りる坂道は古く、根小屋との連絡道、登城道とみられる。
- ② 空堀、土塁＝空堀は埋まり、土塁は崩れる。かつて落差6～10m?
- ③ 二重内升形＝4か所の土塁高まりで迎撃。現在は直進だが?
- ④ 門形式＝せいぜい掘って立ての冠木門?

6) III郭（出升形、馬出し?）、II郭（2の丸）

- ① 本丸直前の最前防衛拠点
- ② III郭南前面は根小屋連絡道からの外敵を備える。2重土居?ダブル防衛線。
出升形、馬出し的に機能したと考えられる。
- ③ II郭はほぼ三角形、段状。西面からの外敵を意識している。上段は蔵地か。
北側は空堀と土塁を挟んで本丸虎口に通ずる。

7) 堀底道と縦堀

- ① いったんIII郭、II郭を出てIII郭空堀の堀底道をすすむ。
侵攻には土塁からの反撃がある。
- ② 20mほどすすむと眼前に縦堀が通行を阻み、主郭土塁、櫓台が聳える。
- ③ 平地に水平に掘る空堀に対して、直角の空堀を縦堀という。敵兵の水平移動を遮断する目的がある。
普通山城に作られ、丘城では珍しい。
- ④ 元気組＝縦堀を一気に主郭土塁、櫓台を攻略する。
自信のない方＝II郭を迂回して本丸に進んでください。

→ 小川家長屋門
名主屋敷



← 道標

→ 郷土の森案内図

郷土の森

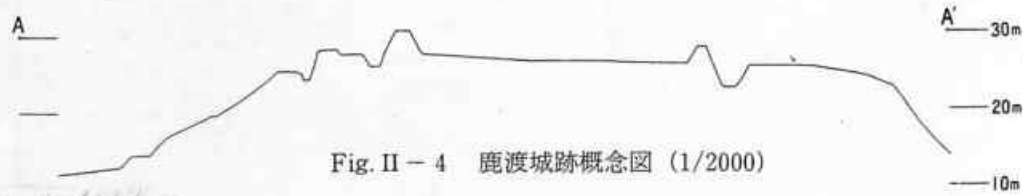
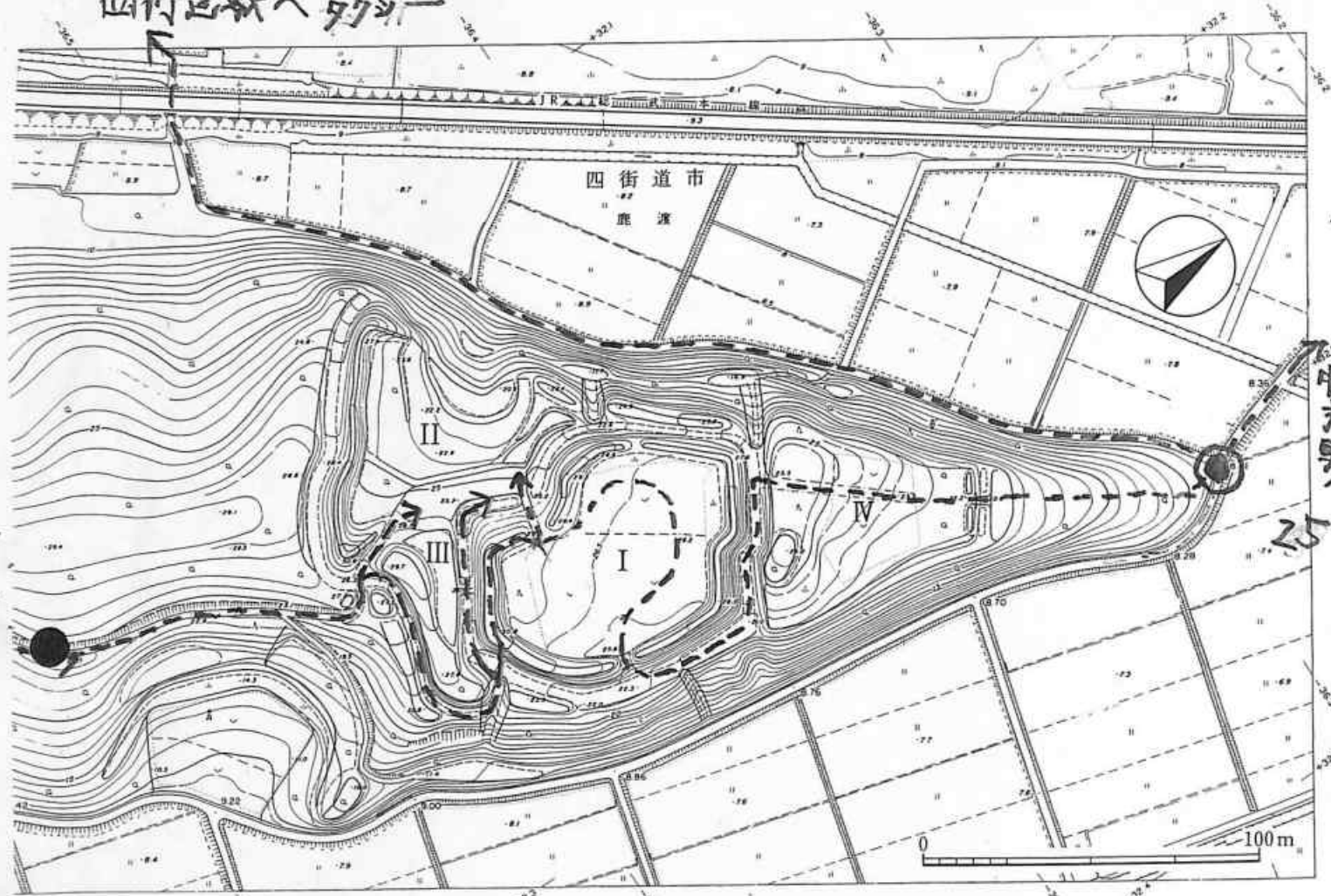
郷土の森へようこそ
この森は身近な自然や地域の歴史に市民が親しめる場所です。
この森は山林をお持ちの方々からのご好意によりお借りしています。
人々の生活と深くかかわりながら長い年月の中でつくられた大切な森です。
マナーを守って利用しましょう。

案内図



このあたりは
四街道駅へタクシー

5



←
かしら
乙



鹿渡城全景

ししわたし
鹿渡城跡 (獅子ヶ鼻岩跡)

鹿渡城跡は四街道市鹿渡にあり、平安時代初期に築かれたと推定されている。この城跡は、北東に延びる約80mの土塁と、南西に延びる約40mの土塁で構成されている。また、城跡の中心には、高さ約10mの土塁が築かれており、これが本丸の土塁と推定されている。この土塁は、城跡の中心を南北に貫き、城跡の東西を区別している。また、城跡の北東には、高さ約10mの土塁が築かれており、これが本丸の土塁と推定されている。この土塁は、城跡の中心を南北に貫き、城跡の東西を区別している。

6

- 8) 主郭(本丸)と櫓台
 - ① 元氣組は本丸櫓台を制覇。土塁上に「鹿渡城址」の史跡杭。
 - ② 主郭を一望=周囲を高さ2~3mの土塁が回る。およそ一辺80mほどの多角形。虎口は3か所あるが2か所は後世のものか。
 - ③ 主郭は詰め城、通常城主や武将は山下根小屋に居住、緊急時に居館を焼いて詰め城に籠城した。主郭には簡単な居館が作られたが本格的な発掘調査が行われていないので詳細は不明。
 - ④ 土塁には柵程度を巡らせる。一段高い所が櫓台、井楼型などの見張台が作られた。
 - ⑤ 本丸虎口=空堀、土橋?、簡単な門、内升形(折不詳)
 - ⑥ 土塁虎口?(後世か)から帯郭へ
- 9) 帯郭
 - ① 帯郭=本丸を一周する細長い武者走り。緊急時は守備兵士の移動などに利用。
 - ② 2つ目の縦堀
- 10) IV郭境の空堀、土塁
 - ① 帯郭はそのまま主郭とIV郭の空堀のせいか土橋に出る。
 - ② 空堀の折歪みと土塁高まり=帯郭から侵攻する外敵の備え。一直線に攻められないよう、横矢掛かり。
 - ③ 土橋跡
- 11) IV郭(3の丸相当)
 - ① 北方からの備え。本城の臼井方向なのでやや荒い構え。しかし、ここを抑えられると脱出口はなくなる。搦手といえなくもない。
 - ② なだらかな斜面が続いて先端、展望台へ。
 - ③ 途中、小規模な堀切空堀、土塁、土橋。本城との連絡のろし台、見張台か
- 12) 展望台
 - ① 城の立地、地形を観察、小休止(トイレは展望台下)
 - ② 展望台を下り、物井駅まで総武本線線路脇を徒歩25分

参考(タクシー)

- ◎ 本1構内 四街道営業所
0120-812343
043-421-2343
- ◎ アスカ交通 四街道営業所
0120-618817
043-433-8817



本丸虎口



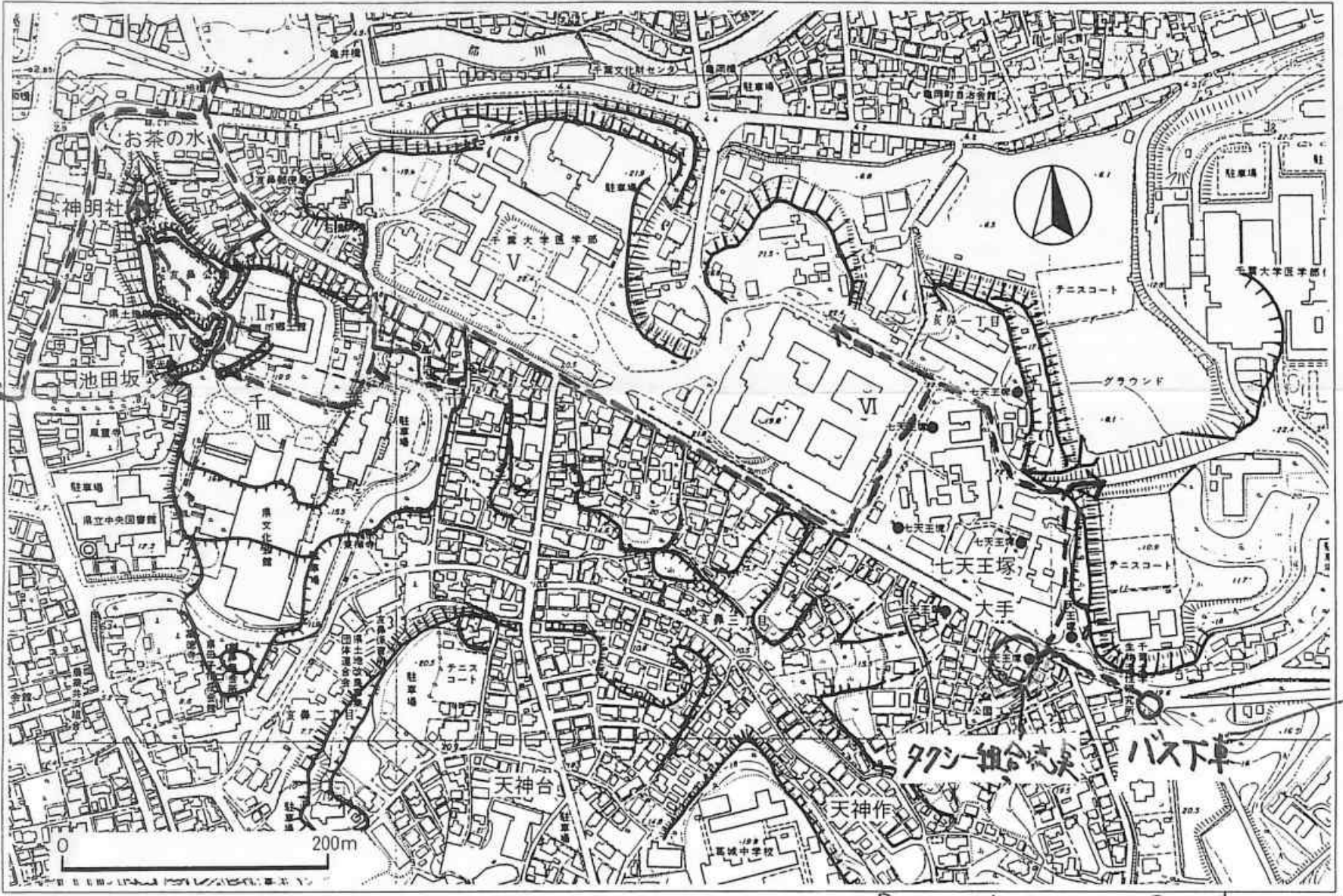
↓本丸

←
大手虎口



本丸土塁

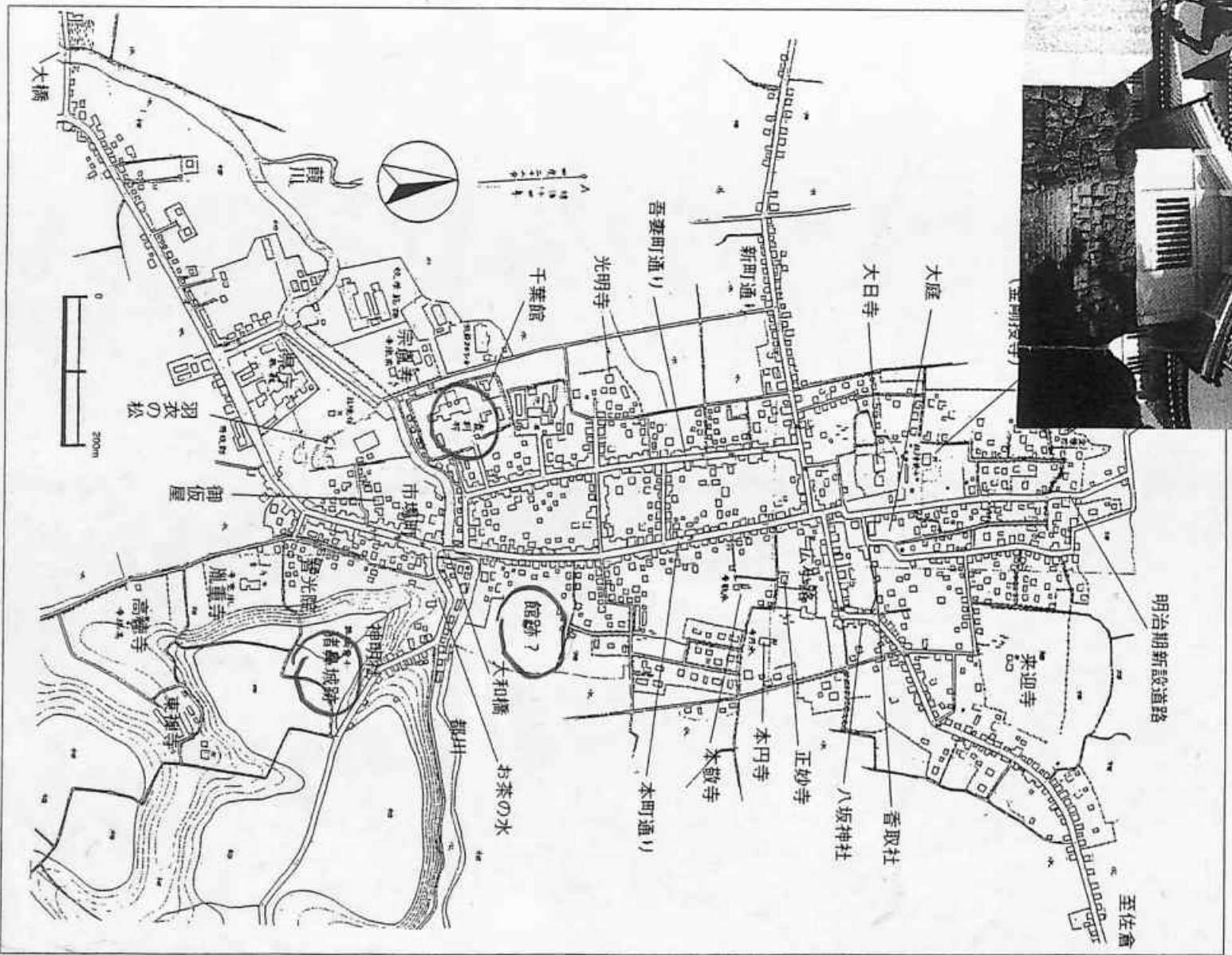
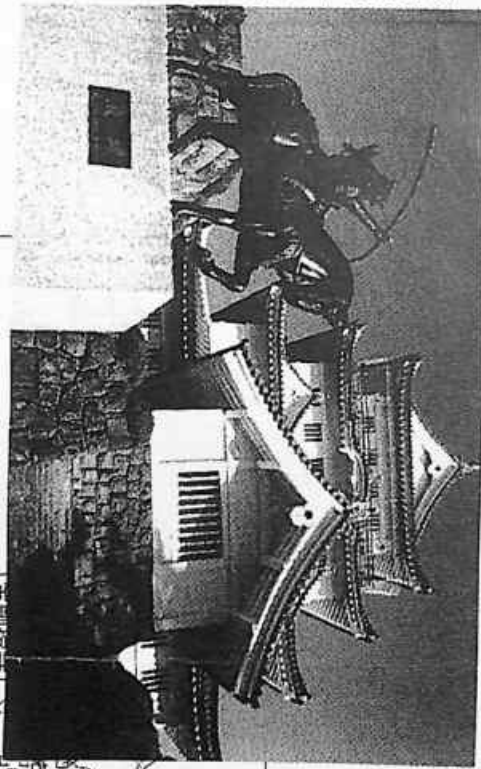




中央博物館
バス下車

バス利用者は七天王塚 or お茶の水公園に先着して欲しい

土葉城址にそびえる
郷土博物館



猪鼻城跡と千葉館跡
(原図：明治15年迅速測図)

2

猪鼻城跡概念図 (作図：築瀬裕一)
木ノ葉ハシ

7 千葉城跡と猪鼻城跡

所在・千葉市中央区本町・亥鼻町
交通・JR本千葉駅から徒歩10分

〔地理〕 千葉は、千葉氏の名士の地であり、現在の千葉市の範囲（土気地区は除く）にほぼ相当する千葉郡、中世の千葉庄の中心地である。地形的には、都川の河口に位置する低地砂州上の市街地部分と下総台地上の亥鼻地区に分かれる。都川河口はかつて入り江になっており、その一部に千葉湊があったと考えられている。ここは、東京湾最奥部に位置し、下総と鎌倉を結ぶ湊として中世前半期までは重要な役割を果たした。

〔歴史〕 千葉庄の在地領主であった千葉氏は、ここに館を構え、そこは千葉堀内とも呼ばれていた。千葉氏は、源頼朝の鎌倉幕府草創時の功績により、下総をはじめ全国各地に所領を得て、有力御家人となった。千葉氏は、本来下総国府の在庁官人とよばれる国内行政の実務を担った役人であったため、下総国府近辺（市川市）にも館を持っており、鎌倉時代の前半期は市川の館が下総の守護所となり、各地の所領支配の中枢ともなっていたようである。その後、千葉氏が九州と下総に分裂するのを契機として、一三世紀の末頃には、守護所も千葉におかれるようになったと思われる。『鎌倉大草紙』では千葉貞胤の時に千葉に移ったという。康正元年（一四五五）、鎌倉公方と関東管領上杉氏との抗争に巻き込まれ、原氏や馬加氏らに攻められ、千葉宗家は滅ぼされる。千葉宗家が滅ぶと、それを継いだ馬加系千葉氏は、文明年間に本佐倉城に本拠を構え、戦国領主として新たな発展を遂げた。一方、戦国時代の千葉は政治的中心地としての役割は失われたが、永正六年（一五〇九）に連歌師柴屋軒宗長が、千葉の妙見宮の祭礼で早馬三〇〇騎を見物しており（『東路の津登』、妙見宮（現千葉神社）を中心とした門前町としてにぎわいは維持されていたようである）。

〔千葉城〕 千葉氏の館の所在地といえ、長く猪鼻城跡のことと考えられてきた。千葉城に比定されてきた猪鼻城跡は、南側から千葉の市街を見下ろすような標高約二〇mの、千葉市立郷土博物館の模擬天守閣で親しまれている台地上（猪鼻山）に所在する。近年の中世城館の研究から、このような台地上に鎌倉時代に館が作られることはあまりなかったことが明らかになってきており、猪鼻城跡は果たして千葉氏の館の所在地であったのかが問題となっている。猪鼻城跡が千葉城跡と認識されるようになったのは、史料を調べてみると近世になってからのことである。中世の確実な史料に千葉城がみえるのは、建武二年（一三三五）の『相馬文書』のみとあってよい。千田胤貞と千葉介貞胤による一族内紛の時、千田胤貞方により「千葉城」・「千葉楯」が攻撃されたことがみえる（「相馬松鶴丸着到軍忠状」・「吉良貞家披露状」）。城郭を台地上に築き、恒常的に維持されるようになるのは、一五世紀の半ば以降のことで、この「千葉城」の合戦の頃はまだ、そのような城郭が築かれるようになってはいなかったのである。この時代の城は、館を戦いの時にまわりに堀を掘ったり土塁を築いたりして城郭化したもの、または、高い山などに一時的に立て籠もるために築かれるものが多かった。「楯」というのも、館のまわりに当時の武器の主力であった弓矢の攻撃を防ぐための楯を立て並べた姿である。したがって、「千葉楯」ともみえるように、千葉城の場合も千葉氏の館が戦闘時に城郭化されたものである。『千学集抜粹』では、千葉氏の館の所在地について「堀内」と記すのみで、猪鼻とは表していない。したがって、台地上にある猪鼻城跡と千葉館は別物である可能性が大きく、市街地のある低地に千葉氏の館の所在する「堀内」があったと考えられる。なお、千葉宗家滅亡後の文明三年（一四七一）、古河公方足利成氏が一時千葉に移っているが、この時には千葉館に入ったのか、猪鼻城に入ったのかは不明である。

「伝千葉館」 現在の千葉地方裁判所の地は「御殿跡」と呼ばれていた。この御殿は、千葉市若葉区御殿町にある御茶屋御殿とは別のものだが、この千葉御殿にも徳川家康が鷹狩りの折りに止宿したといわれており、富氏の屋敷を取り立てたという船橋御殿と立地がよく似ているので、千葉氏の館跡を家康が御殿に取り立てた可能性もあろう。ここは都川に接した低地で、明治の初め頃は周囲に土塁と堀があり、堀は水田として耕作されていたという。その規模は、一辺約一〇〇m(方一町)であった。このような土塁と堀に四周を囲まれた方形館は、千葉氏の活躍した鎌倉時代のものとはいえず、千葉宗家が一五世紀の半ばに滅んだ頃のものである可能性がある。この方形館と推定される部分の北側に光明寺(不動尊)、西側に隣接して千葉宗胤の建立とも伝える宗胤寺(市内弁天町に移転)があり、これらも含めて千葉氏の館群が形成されていたものと考えられる。千葉氏は、千葉に本拠の一つをおいていたが、一カ所に館を構え続けたというのではなく、代替わりなどにより移動した可能性も高い。千葉の市街地のなかにはそうした館が複数埋もれている可能性がある。「猪鼻城跡の構造」 名前の由来が、その形が猪の鼻に似ているためとも、亥の方角(北北西)に城の台地が突き出しているためともされ、これはI郭付近の地形に対応しているが、城の範囲はかなり広い。元禄二年(一六八九)の『涌谷伊達氏文書』によれば、猪鼻城跡の範囲は、距離的にみて猪鼻山の先端部、現在神明社がある突端から、七天王塚のあるあたりまでとされており、この当時から城域はかなり広くとらえられていた。千葉大学医学部の敷地内には、かつて堀があったともされ、七天王塚は土塁の残存である可能性が高く、猪鼻城跡は複数の曲輪によって構成された大規模な城であった可能性が大きい。地形的に郷土博物館(文化会館地区)と千葉大医学部地区に分かれるが、前者が城の中心部分である。後者の部分は医学部建設による地形

の改変により、曲輪の配置などははっきりしない。I郭周囲には土塁が残り、郷土博物館との間には堀が確認されている。北西端の神明社のある部分は小さな独立した曲輪になっており、物見の跡と伝えられる。

「発掘調査の成果」 最近の調査によれば、I郭内部には明確な遺構は確認されておらず、後世に削平された可能性もある。I郭東側からは比較的大規模な堀が検出されており、底から五輪塔が検出されている。過去には火葬骨を納めた鎌倉時代の蔵骨器がI郭土塁の下から発見されており、猪鼻山には中世前期に墓地があった可能性が高い。それをある時期に城郭としたものと考えられる。時期のわかる出土遺物では、一四世紀代から一五世紀中頃までのものが最も多く、千葉宗家の時代のもものが主体といえる。郷土博物館東側からは礎石をもつ規模の大きな建物も検出されているが、ここに千葉氏の館があったのかというと、千葉氏の館とみるには出土遺物は粗末すぎるといえる。儀式用の土器であるかわらけがたくさん検出されていることや、珍しい陶製の狛犬(瀬戸窯)もみつかったっており、神社であった可能性も考えられる。

「城跡の性格」 この城は、地域の中心的城郭といえる大規模なものであり、戦国期に千葉の町を守るために、北部にある高品城とともに築かれたものと思われる。『千学集抜粹』や『本土寺過去帳』には、永正一三年(一五一六)に猪鼻城が攻められ落城したことが見え、この戦いは生実城に足利義明が入り小弓公方が成立する時期の争乱のひとつであったと推定される。発掘調査では確実に一六世紀代といえる遺物はわずかしか出土しておらず、永正一三年の落城説と大きくは矛盾しないといえる。この城は、一五世紀の後半に生実城に本拠をおいていた原氏の築城になる可能性が大きいと考えられる。

(築瀬裕一)